令和５年度幼稚園学校評価（中央幼稚園）

分　野	評価項目	評価の着眼点	自　己　評　価 達成及び取組状況	評価（点数式）	学校関係者評価 評　価（記述式）	評価結果を踏まえた今後の取り組み
教育課程・指導	①学年・学級経営	教職員は、教育目標の達成を目指した学級経営を行っているか。	各担任は、教育目標に基づいた学級経営案、指導計画を立案し、保育実践を行った。そして、幼児が主体的に遊びに取り組み、繰り返し楽しんだり、試したり工夫したりしながら遊びを続けたり、広げたりできるような環境の構成に努めた。また、クラスでの共通体験を大切にして保育を進めたり、遊びマップを活用したり、応答的な関わりを大切にしたりすることで、子どもたちの遊びが継続し、学びにつながった。 毎月、毎学期ごとに計画と実践からの成果と課題を捉え、次への保育につなげていくようにした。	4	・特別支援教育について、保護者の受けとめや思いにズレを感じることがあったとあるが、保護者自身も戸惑いがあったりし、どう受け止めて良いか悩むこともあると思う。保護者が期待している姿と実際の姿に差があるのかもしれない。保護者の思いを受けとめながらゆっくり話し合ってほしい。 ・人権同和教育の自己評価が低いように思った。行事等を見学すると、特別支援児への対応をはじめ、一人一人の個性を引き出すような支援をしていることを感じた。もっと評価が高くても良いと思うが、なぜ自己評価が低いのか疑問に思う。→自分がめざすものが高いために自己評価が低くなっているのではないか。周りから見たら頑張っていることが評価できる。 ・インクルーシブ教育が本園の特徴である。障がいのあるなしにかかわらず一緒に過ごしている。これが人権・同和教育につながっていく。インクルーシブ教育を中心に取り組んでいくといろいろな良い効果・影響があると思う。多様性が叫ばれる世の中でもあり、幼児理解ができていないと進められないことである。自己評価が低いのは意欲の表れとも捉えられる。今後もしっかりやってほしい。 ・行事については、運動会・発表会・作品展と、子どもたちの学んできたことを取り入れて工夫していることを感じた。今後もこうした取り組みを続けてほしい。	・年度当初に教育目標を共通理解し、各学年の子どもの実態を捉え、それを踏まえた学級経営案を作成して取り組んでいく。その中で、子どもの思いを引き出し、生かしていくことを重視し、子どもと共に生活を創り出すことを大切にしていく。 ・発達の個人差を踏まえ、その子どもにとって今日指すものは何かを捉えた指導に努める。教師一人の考えで進めるのではなく、複数の職員で多面的に捉えて進めていき、その子どもにとって最適な学びとなるよう努める。 ・今後も、インクルーシブ教育推進園として、個別支援を要する子どもと共に生活する中で、子どもたちが、いろいろな人がいることを知り、認め合っていけるような学級づくりに努める。 ・個別支援においては、担当者がその子どもの発達についてや具体的な支援、保護者との連携等に悩むことも多いので、担当者一人で抱えることのないよう皆で見守ったり支えたりし、チームで育てるようにする。また、えがおの会（特別な支援を要する子どもの会）の取り組みを充実させる。 ・人権・同和教育について、職員それぞれが人権意識を高め、相手を認め尊重する柔軟な心を持ち、多様化する価値観や社会に対応できるよう努める。また、子どもの人権を尊重した保育を行っているか、自己を振り返りながら日々の保育に努める。 ・行事については、今後も子どもたちの思いや興味関心を取り入れながら、子どもたちが意欲的に取り組み、自己を発揮することで充実感が味わえるよう工夫する。そして、そうした姿を保護者に見てもらうことで、子どもの成長を確かめ合う機会としたい。 ・幼小連携については、小学校と積極的に連携を取り、交流活動を進めていく。また、互いの保育・授業の様子を見るなどして教育の相互理解に努めたい。
	②幼児理解	教職員は、一人一人の幼児の発達の姿から課題を捉えて保育を行っているか。	日々の生活の中で、幼児の姿から個々の背景を考慮しながら内面をくみ取り、受容的態度を心がけることで、幼児が安心して自己表出する姿が見られるようになった。 各学級の職員カンファレンスでは、それぞれの幼児の育ちと課題を多面的に捉えて共通理解し、支援の方法を共有して進めていった。 保護者には、学期ごとの成長の記録「あゆみ」や個人懇談を通して子どもの様子を伝え、共に成長を喜ぶことができた。	4		
	③特別支援教育	特別な支援を必要とする幼児の実態や課題を明確にし、計画的・組織的に指導を行っているか。	インクルーシブ教育推進園として、８名の幼児が在籍しており、専門機関（療育、市指導員、心理士）や保護者と支援会議を通して連携を図り、幼児の発達を支えた。 担任や特別支援教育補助教諭が、個別の指導計画を作成し、学級での支援のあり方について共有したことで、学級の幼児が共に育ちあう姿に繋がった。 保護者に日々の子どもの様子を丁寧に伝え、共に成長を喜んだり支援の仕方について連携を図ったりしたが、保護者の受け止めや思いにズレを感じることもあり、課題も残った。	3		
	④人権・同和教育	教職員は、自らの人権感覚を磨き、幼児に人権意識の芽生えを培うように配慮しているか。	まず、幼児のありのままの姿を受け止め、認めることで幼児の良さを引き出したり自己を発揮できるようにしたりし、自尊感情を高めていけるよう努めた。また、学級の話し合いで互いのいいところ見つけをしたり、素直な気持ちを発表できるように促したりすることで、集団の中で互いの良さや違いを認め合い受け止め合える学級の雰囲気ができた。 職員は、人権同和教育研修に積極的に参加し、自分自身の人権感覚を磨くよう努めた。今後更に、多様性についての理解を深め、自分の固定観念にとらわれずに他者の思いを受け止めて柔軟に対応する力をつけていく必要がある。	3		
	⑤行事	教職員は、行事を幼児の発達を促す機会と捉え、工夫、改善しているか。	コロナ禍を経て行事などを見直し、幼児が行事を通して意欲的に取り組む姿や自信を持つ姿につながることを最優先にして計画し取り組んだ。そして、幼児が興味を持っていることをきっかけにして取り組みやすくしたり、少し頑張ればできるような内容を提案し、幼児が達成感を味わえるよう工夫した。また、行事は保護者に幼稚園教育を理解してもらえる機会と捉え、本番までの取り組みの様子、頑張っている家庭を伝えたことで、本番で見られた子どもの成長の姿を共に認めたり喜んだりすることができた。 行事終了ごとに成果と課題について職員間で話し合い整理した。これを来年度に生かしていきたい。	4		
	⑥保幼小連携	近隣の小学校等との連携を密にし、なめらかな接続に努めているか。	保幼小交流の日や今市小の行事に幼児が参加したり、年長児が小学校行事や授業の様子を見学したりし、小学校に期待と憧れの気持ちをもつことができた。幼児と今市小学校児童との交流活動については、予定を合わせることが難しかったが、できることを工夫して行った。 就学予定校と、就学児童について情報交換し、連携を取ることができた。 互いの教育・保育を理解するために、実際に見たり話し合ったりするなどの教職員の研修の機会も大切であると思う。今後取り組んでいきたい。	3		
家庭・地域との連携	⑦家庭・地域との連携	幼稚園と保護者、幼稚園と地域（未就園児等）との協力関係はできているか。	保護者会活動は、コロナが落ち着いたので、活動再開の方向で進めていった。しかしながら、以前の活動の様子を知る保護者が少ないこともあり、活動を元に戻すのではなく、新たに取り組みやすい形で進めていった。役員中心の活動となることもあったが、行事では幼児がとても喜び、役員保護者もやりがいを感じることができた。しかし、保護者の中にはPTA活動に消極的であるという自己評価も多い。 今後は、コロナで消極的になりがちだった地域の方との交流をもう少し工夫する必要がある。	3	・保護者評価で、園行事への参加について昨年度より数値が上がっていることは良いと思う。今後、子どもたちと行事を楽しむ保護者がもっと増えていくと良いと思う。 ・地域との交流については、地域から来てもらうことは難しいかもしれないので、積極的に地域に出かけていくと良い。	・PTA活動について、保護者は、子どもと一緒に活動を楽しみたい気持ちや協力したい気持ちがあるので、今後は、役員だけでなく、保護者皆で活動できるようにしていきたい。しかし、多忙な保護者にとって負担感が増さないよう且つ充実感が感じられるような方法を工夫していく。
研修	⑧研究・研修	教職員一人一人が、園内外の研究・研修の機会を自己研鑽の場として受け止め、進んで研究・研修に取り組んでいるか。	「自ら思いや考えを表しながら、夢中になって遊ぶ幼児の育成」をテーマに、幼児の遊びの過程を支える援助を大切にした保育を行った。各学年ごとに園内保育研究会（5回）を行い、幼児が遊びを通して学んでいく過程において、『教師の応答的な関わり』に着目して話し合うことで、保育の資質向上に努めた。しかし、他業務も多い中、研究についての話し合いに費やす時間が取りにくかった。十分にできなかったことが課題である。 園外の研究会、研修会にも積極的に参加し、学んだことを自身の保育・教育に生かしていった。また、職員会議で伝達したり、復命書で共有したりした。	3	・研究についての話し合いに費やす時間が取りにくかったとあるが、保育時間が長かったり時差があったりして職員が寄り合う時間をとるのが難しいということがわかった。少しでも時間をつくりだす工夫をしてほしい。 ・研修に出かけることは難しい場合もあるが、復命書で共有しているとあるので、そうした方法で今後も学んだことを全体に広げていけると良いと思う。	・保育・教育の質を高め、子どもの育ちを支えていくためには、互いに保育を見合って話し合ったり、目指すもの・目標等について共通理解したりすることが大切であり、実際の保育ではチームワークが必要である。そのためにも、日々の保育と事務に追われる中で、時間をつくりだすために、個々が意識したり、計画的に進めたりしていく。 ・また、隙間時間に気軽に子どもについての前向きな話ができる雰囲気づくりに努める。
組織運営	⑨園務	教職員は、他教職員と協働し、計画的に園務を遂行しているか。	園務分掌を基に、前月下旬の職員会議で起案し、早めの計画実行に心がけた。チーフ職員を中心に係分担し、協力して進めることができた。実行後は成果と課題をまとめ、職員会で共有して来年度に向けての改善点等を記録に残すようにした。 職員数が多いというメリットを生かし、欠員があった場合は補い合って行うことができた。また、他人任せにせず、全体を見なが互いに助け合うことができた。	4	・組織運営については、改善点を記録に残すようにしているとあるが、残すだけでなく、来年度に生かせるようにしていってほしい。	・今後は、前年度の反省点、改善点を全員で共有し、そこを踏まえて取り組む。 ・事務関係においては、かなりの時間を費やすこともある。園務分掌を見直し縮小したり、これまでのやり方にとらわれず、時間短縮できる方法を工夫する。
安全管理・保健管理	⑩危機管理	園の危機管理及び幼児の安全や衛生の管理体制を全教職員が理解し、適切な対応に努めているか。	災害発生に備え、危機管理マニュアルを基に毎月避難訓練を実施し、対応や役割を確認した。本園の玄関前は、急な大雨時に冠水することがある。その場合の安全確保、保護者誘導等、職員間で連携をとって行うことができた。 小さなことでも「ヒヤリハット事例」として挙げ、事故を未然に防ぐよう全職員で共有した。 感染予防として、引き続き手洗いや消毒、視診や検温による幼児の体調管理を行った。	4	・安全管理について、大規模なことは市と協力してやってほしい。 ・園児の健康・安全にかかわることに関しては引き続き対策をしてほしい。	・年度初めには再度「危機管理マニュアル」を見直し、今の事態に即しているか検討する。特に、梅雨期の洪水については職員間でしっかり連携を取り、園児の安全を守れるようにしていく。 ・今後も、ヒヤリハット事例を共有し、小さな事故も未然に防ぐよう努める。また、感染拡大防止の対応マニュアルを周知し、協力して取り組む。
教育環境整備	⑪園地・園舎・遊具等の施設・整備	園地・園舎・遊具等の施設・設備を定期的に点検し、必要な改善・管理を行っているか。	月1回、安全点検項目に基づき、園舎内外や遊具の点検を行い、必要に応じて市の担当課に連絡し、環境整備や修繕を行った。また、大きな修繕については計画的に行えるよう予算要求をしているが、園舎は築30年を超えるため、大きな修繕についてはすぐにしてもらうことができない。 日頃、幼児が遊んでいる公園の施設点検も行い、修繕個所について市へ届けている。また、草刈りは地域の方が厚意でしてくださっている。	3	・修繕箇所は引き続き市へ要望していってほしい。 ・子どもたちが遊ぶ公園の草刈りを地域の方がしてくださっているとのこと、これからも地域とのつながりを大事にしていってほしい。	・園舎の老朽化が進んでいるため、今後も園児が事故に巻き込まれないよう丁寧に点検し、修繕を要する箇所があれば処置したり、市へ報告して早急な対応を要望する。

※自己評価の評価基準　４：十分達成している　３：概ね達成している　２：改善を要する部分がある　１：大いに改善を要する